

フィリピン戦（ホロ島・レイテ島）の関係者を訪ねる旅

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像（５）

松岡 勲

はじめに

今年（二〇一三年）六月二十九日から三〇日にかけて第二次世界大戦中のフィリピン戦（ホロ島・レイテ島）の関係者を岐阜県恵那市と名古屋市中に訪ねました。この旅をしたのは、私の先輩のお父さん・須藤信吾さんがホロ島で戦死されていて、その戦死の状況を調べるなかで、関連する書籍（戦記）と出会ったことにあります。今回はその報告です。

ホロ島戦の生還者・奥村達造さんの戦後

まず最初は、ホロ島戦の生還者の奥村達造さんの息子さんの正志さん（六三歳）と達造さんの奥さんのちとゑさん（九〇歳）を岐阜県恵那市に訪ねました。奥村達造さんは、一九四四年六月一日、臨時召集により名古屋中部八部隊野砲三連隊に入営し、その後独立混成第五旅団下の砲兵隊員としてフィリピン・スーール諸島のホロ島に送られました。そして、激しいホロ島戦を生き残り、敗戦を迎え、ミンダナオ島の米軍捕虜收容所に收容された後、一九四五年二月二四日に帰国しました。戦後は恵那郵便局に復職しました。退職後に『ホロ島戦記／独立混成第五十五旅団砲兵隊第二中隊員の手記』（一九八〇年七月刊）を自費出版されたのですが、私はこの本を奈良県立図書館情報館で閲覧しました。

同書はできる限りホロ島戦の文献にあたり、他の部隊の戦場での悲惨な体験も把握しようとした非常に優れた戦記であると感じました。また、亡くなった戦友への思いがこめられていて、多くの戦友の戦死の状況と個別の名前を書き残そうという執念がこもっていました。さらにこの本は、敵であったモロ族のゲリラに対する恐怖感も強く書きこまれています。スペイン・アメリカ・日本の植民地支配とそれに対する民族抵抗の歴史にも目を向けていて、公平で客観的な叙述であると感じました。戦争前に奥村さんは「電信局に勤めていた」ありましたが、戦後その仕事に復職されたのだろうか、このような過酷な体験を経て戦後どのように生きられたのであろうかと関心をもちました。



フィリピン出発前に下関にて（真ん中の眼鏡の方が奥村達造さん）

した。読了後しばらく間をおいて、本の奥付にある奥村さんの住所に連絡してみました。本の発刊から三十数年たっているのですから、連絡はつかないだろうと思いましたが、幸いにも電話口息子さんが出られました。私は飛び上がるほど喜びました。達造さんは、一五年前に亡くなられていました。

息子さんの正志さんにお会いして、お父さんのお話をおうかがいしました。正志さんには妹さんが二人おられて、自分の子どもと甥っ子や姪っ子にこの本を「強制的に読ませる」と言われました。なぜなら、「おじいさんがホロ島で死んでいたら、お前たちはこの世に生まれてこなかっただろう」との考えからでした。この言葉に私は大変感銘を受けました。

お母さんのちとゑさんは九〇歳にもかかわらず大変お元気でした。達造さんとは郵便局時代の同僚で電話の交換手をされていて知り合われ、職場結婚でした。おふたりは二四歳の同年齢でした。郵便局勤務の最初は庶務会計課勤務で比較的ゆとりのある仕事でした。正志さんが生まれ、その下の妹さんがお母さんのお腹のなかにいる頃、日曜日になると近くの阿木川とその支流の濁川に魚釣りに連れて行かれ、シラハエ（オイカワの地方名）釣りを正志さんに教えられました。お腹の大きいお母さんがお弁当を持って釣り場に来られ、家族団欒のひとつときを過ごしたとのことでした。正志さんは、「あの頃が親父にとつては穏やかな日々だったのでしよう。戦場での凄まじい体験が癒やされたときだったと思います」とおっしゃっていました。

その後、一九六七年になって、達造さんは郵政マル生管理者訓練を受けられます。その訓練は郵政大学校専門訓練で、当局側の郵政労働者合理化攻撃の前面に立たせるための研修でした。そし

て、労務管理担当者として全通労働者の抵抗闘争と激突し、組合側が裁判に訴え、裁判の当事者にまでなり、日夜その対応に忙殺されました。その労使対立が先鋭な時期は一九六七〇年頃だったそうです。達造さんにとつて戦後もひとつの「戦場」、それも不幸なそれだったと推測されます。そして、疲れ果て、一九七七年六月に管理者職を辞め、一九七八年三月に退職されました。退職後、『ホロ島戦記』の執筆を開始され、熱心に資料等の収集、生存者への連絡、聞き取りをされました。本が完成した後、さまざまな所に寄贈されたり、また読まれた方からの手紙に返事を書かれたりと生き生きと活動されていたとことです。「その時期が父にとつて一番充実していた時期だったと思います」と正志さんは言われました。その後、六三歳の時に脳梗塞を発症し、闘病生活が始まります。さらに二度目の脳梗塞の発症、壊疽で三度足を切断するという大変苦しくて、厳しい闘病を続けられ、一九九八年六月一五日に亡くなられました。七五歳でした。亡くなる前に達造さんは「戦記はもう残部が少なくなつたので、お金を出すから再刊してほしい」と正志さんに頼まれ、本が生前に再刊されました。その本をお兄さんの彌



奥村ちとゑさんと正志さん

太郎さんが奈良県立図書情報館に寄贈されたものを私が閲覧した
ことになります。奥付の所に「(寄) 奥村彌太郎」と書き入れが
ありました。達造さんの妹さんの短歌に「みんなみの島に果てに
し戦友(とも)に捧ぐ戦記遺して兄は逝きたり」とあります。

レイテ島とマスバテ島戦の生存者・奥村彌太郎さん

二つ目の出会いは、奥村達造さんのお兄さんの彌太郎さん(九
三歳)がフィリピンのレイテ島とマスバテ島戦の生存者であり、
正志さんの案内でお会いできたことです。彌太郎さんは高齢にも
関わらず大変お元気で、記憶も鮮明でした。正志さんから叔父さ
んがレイテ戦の体験者であることを聞いていたので、お会いする
前に大岡昇平著『レイテ戦

記』(全三巻)を読み終え
て岐阜県に向かいました。

偶然にも正志さんもお父さ
んの本箱から『レイテ戦記』
を取り出され、読了されて
いました。これまで叔父さ
んからその体験をきっちり
聞いたことがないので、こ
の機会の詳しく聞くために
読まれていたのでした。達
造さんは『レイテ戦記』を
座右に置いて『ホロ島戦記』
を執筆されたようでした。



レイテ戦の生存者・奥村彌太郎さん

大岡昇平の本によると、前回に書きました「捷号作戦」は、米軍
のレイテ島上陸必死の情勢のなかで、従来のルソン島決戦を変更
し、レイテ島決戦になりました。

彌太郎さんは、一九四〇年一月から一九四四年六月まで第二
六師団(「泉兵团」) 独立歩兵第一二連隊第一大隊三中隊所属で中
国大陸に派兵され、大陸打通作戦(河南作戦)に参加されました。
また、対ゲリラ戦で九死に一生を得られたとのことでした。そし
て、南方戦線の情勢悪化により、レイテ島へ転送、転戦させられ
ました。フィリピンのルソン島へ向かう途中のバシー海峡ではア
メリカ軍潜水艦の攻撃で艦船が撃沈され、一八隻中七隻しか残り
ませんでした。輸送船が撃沈されるなかで彌太郎さんの乗る艦は
沈没の危機を免れました。さらに一九四四年一月二十四日、レイ
テ島上陸の前にアメリカ軍爆撃機の爆撃に遭い、レイテ島に上陸
できず、近くのマスバテ島に逃れ、そこで敗戦の日を迎えられま
した。マスバテ島に上陸した一〇〇名は敗戦時には六〇〜七〇名
になっていたとのことでした。

以下、『レイテ戦記』から第二六師団のレイテ島での状況を引
用します。「その(第二六師団の)一隻「第二日新丸」には(略)
十一月一日明け方、シブヤン海中のマスバテ島付近で暗礁に乗り
上げてしまった。翌二日レイテ島から帰投中の高速輸送船に救助
されてマニラに帰った。十一月十八日の第五次輸送に加えられた
が、途中B25に襲撃されて、再びマスバテ島南部に待避、乗って
いた二等輸送艦が被爆沈没したので全員上陸、約二〇〇名が終戦
時まで山中に残っていた。」(師団からの帰還者は三〇〇余名であ
るが、大部分はマスバテ島からの帰還者とルソン島残存部隊で、
レイテ島からの帰還者は、将校一、兵二二、計二三名に過ぎない。)

(第二巻、十五 第二十六師団)

敗戦後、彌太郎さんは米軍捕虜収容所に收容され、部隊全体が日本に引き上げるまで、捕虜全体の後始末に関わられ、帰国されたのは一九四六年一月、二六歳の時でした。二〇歳の招集から実に六年の歳月がたっていたのでした。帰国後は(恵那市に合併前の)蛭川村の村会議員、教育委員長を勤められ、引退後、壮健な現在にいたっておられます。

ホロ島でお兄さんを亡くされた伊藤美代さん

翌日、岐阜県からの帰りに名古屋までまわり、ホロ島で亡くなられた金子克巳さん(享年二三歳)の妹さんの伊藤美代さん(八三歳)とお会いしました。伊藤さんは亡くなったお兄さんへの回想集『金子克巳と昭和の時代』を自費出版されていました。私はその本をインターネットで入手し、その本の奥付の書かれていた住所に連絡し、昨年末より文通をしていました。

金子克巳さんは、一九四五年四月五日にホロ島テンバンガン三叉路付近でアメリカ軍の爆撃で亡くなられました。日本軍がシロマン山へ敗走する前でした。この本は、お兄さんの生育史、戦死されるまでをたどる章、伊藤さんがなぜ回想記を書こうと思うにいたったか、お兄さんの戦死の状況を調べ歩く過程をまとめた章、同窓の方の座談会・回想記の章から構成されており、亡くなられたお兄さんへの妹さんの思いと愛情のこもった、また息子を亡くされたお母さんの悲しみが伝わってくる回想記でした。本の最後の方で、お兄さんへの思いを短歌に書いていますが、そのうちいくつかをあげます。

ホロ島の土となりたる兄連れたしちはは眠るこのふるさとへ
ただ一枚残りし戦死の兄の写真柩に入れて母旅立ちぬ
フリーピンに戦死したる兄思い戦記むさぼる初老の我は

本の感想をお送りした後、伊藤さんからお手紙と「回想記が縁慰霊の旅」という新聞記事とともに『金子克巳と昭和の時代その後』をお送りいただきました。それによると、前著の出版を機にホロ島からの生還者と巡り会うことができ、一九八九年にホロ島に渡航でき、現地で遺族の方々と慰霊祭を催すことができたとのことでした。この本ではその経過が丁寧にまとめられています。私が特に感動したのは、伊藤さんが戦死されたお兄さんに出された手紙(それは建立されたお地藏さんの台座に納められました)「拝啓、金子克巳様へ返事の来ない手紙」でした。その中で一九四五年四月に戦争で命を奪われたお兄さんに金子家の御家族の戦後の「生」を報告されていたしましたが、戦後をお兄さんとともに生きることができなかった御家族の悲しみと無念さが、その背後から聞こえてくるように感じました。ま



お兄さんを亡くされた伊藤美代さん

たその後のお手紙には、「私は靖国神社に兄が祀られているとは全く思いません。ですから、東京へ行っても靖国神社に参詣しようという気持ちは全く起こりません」とありました。

伊藤さんは小学校教員をされ、五四歳で退職されたとのことでした。お会いした日は教会の礼拝の帰りとのことで、今もいろいろな社会活動（卓球・コーラス・社交ダンス等）をされていて、大変お元気でした。時間がたつとともに兄のことを忘れるが、「母のことを思い出すとともに兄のことを思い出します」とおっしゃっていました。その言葉が印象的でした。六月末はこのような有意義な出会いができ、大変充実した時間が持てました。

おわりに

今年の七月二一日に四八年ぶりに中学校の同窓会（茨木市立養精中学校旧三年B二組）を開きました。なぜ同窓会を開いたのかといえますと、私の中学校三年生時の靖国神社遺児参拝について、当時の学校と教員の側の関わりがどうだったのかを調べたいと考えたことからきています。退職教職員の会のルートで担任だった林實先生の所在を探し、そして先生を探しあてて、二年前の八月末にお会いしました。残念ながら、「当時は教員になったばかりで、遺児の靖国参拝についてはまるで記憶にありません」ということでした。林先生にお会いしたことをきっかけに近所に住む同級生と相談し、同窓会を開く相談を始めましたが、先生が重症の病気に罹患され、入院生活が続き、一度断念をしました。再度、今年になって友人たちと同窓会を開く計画を復活し、過日、同窓会を参加者一一名で開くことができました。その際、林先生も退

院後の病身でしたが、奥様付き添いで参加いただけました。先生は八〇歳になられ、「あと二〇年は生きる。百歳までがんばる！」とおっしゃっていましたので、先生のお元気回復につながったようで、同窓会を開いてよかったと思いました。

私が同窓会を久方ぶりに開こうとした本意は、同窓生と再会すること、第二次世界大戦末期に生まれた私たちが生きた中学校三年生当時の「時代の空気」を感じ取ることができないのではないかとということでした。同窓会では私のそのような気持ちを話し、私の書きました「一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像」の文章を配りました。同窓会后、二人の女性から私の配った文章への感想の葉書をもらいました。東京に住むSさんは「広島被爆ピアノの演奏会」のサポート活動をしていて、「小学校の時に見た『原爆の子』の映画がずっと心に残っています。今は、広島被爆ピアノとのご縁で平和で核なき世界を念じています」とありました。私は何らかの形で演奏会に協力したいと思っています。もうひとりの大阪在住のAさんは、「私も父がシベリアに抑留されていて、私が四く五歳ぐらいの時に帰って来たのをうすぼんやりと覚えています。右足の向こう脛に弾丸の跡がくつきり有りました」と書かれていました。また、「政治面で靖国神社の事が出てきますが、これからは肝に銘じておきます。戦中派生まれの人間としての努めとして！」ともありました。あらためて戦争の記憶をたどる意志を強くしました。今後は以前から気になっている「京都市における小学校六年生時の靖国神社遺児参拝」について調べる予定であります。